都櫻

堀尾トメ

野原常子と申すは私の學校の先輩の教員でございます一昨年の春のお休みにその足の痛みを養はんために日奈久温泉に入湯せられました。その時校庭の櫻が咲きかけましたので私はその花を手紙に封入してこのでたらめの謠曲と共に御見舞として送りました。

花咲(ソキ)きにほふ春のみち〳〵日奈久の里に急がん之(詞)は熊本縣立女學校中庭の櫻にて候。さて年毎に我を愛で給ひし常子の君には、此の程御足のいたづきにて日奈久の出湯にと御出候程に。我が代りとして御樣子具さに見てまゐれとの。とめ子の君よりの仰にて只今日奈久の里へと急ぎ候。切

筑紫(道行)なる阿蘇の高根に立つ霞〳〵、をちこち人の袖輕く、吹く春風もかすかなる、うまやぢすぎて宇土の里、誰が我々をまつはしや、架る小川の水清み、釣する人も有佐山日奈久の里に着きにけり〳〵。詞急候程に是は早や。葦北の國日奈久のわたりに着て候。早や〳〵柳屋(男)を尋ねばやと存じ候。如何に此の内へ案内申し候。誰(男)にて渡り候ぞ。都方(ソキ)より罷り出でたる櫻にて候。さて此の宿に常子の君といふ方の御泊り候か。さん(男)候。之(ソキ)は熊本縣立女學校の櫻。とめ子の君の御代りとしてはる〳〵是まで尋ねまゐりて候此の由具さに御傳へ候へ。畏(男)つて候。

實(シテ)にや常子旅窓に客たえて春の日いとゞ暮しがたう、永日に友無うして春の日いよゝ永し、足痛うしては散歩も難く、頭疲れては書見もつらし、思ひこそやれ都の花、我友はいかに見るらむ、咲き出でむ都(男)の花を殘しおきて、思はぬ方に旅寢をやせむ。如何に申候。只今都方より櫻の花のまゐり候が此方を問ひたき由仰せられ候。何(シテ)と都方より櫻の花のまゐり候とか。はや〳〵此方へと御傳へ候へ。畏(男)つて候。如何

に申候。お出の由常子の君に申し候へば。はや〳〵御入あれとの仰にて候。然らば案内下されうずるにて候畏(間音)つて候。常よりも春べになれば柳屋の。柳の糸こそ光ますらめと眺れば、かざしの花も穿く靴も名に負ふ宿の女將、柳屋の所々の廊下の清ければ、足をすべらす花の客人のころびころふ廊の面、實に心地よき宿屋かな〳〵。あら(ソキ)笑止や。常子の君には物思ひの體にて御入り候。是こそ彼の學びやの櫻なれ。しかもとめ子の命受けて。是まで來れる櫻花なり。花の色香は淺くとも、心ばかりを御覽せよ實(シテ)にや誠の友ならで、はるけき道を如何にせん、嬉しや今こそは思ふ友こそ來りけれ、來りて我や慰めん、我にははるゝ胸のけぶり、心の雲をはらへば櫻こそ上なかりけれ。是迄(同音)なりや人々よ〳〵いとま申してさらばと、病人の繃帶濕布片、皆ぬぎすてゝ我こゝろ、さくら花、いと柳、日奈久の海の濱松と、榮ゆる足を引き立てゝ、都へ歸るぞ嬉しけれ〳〵。

素性法師

見てのみや人にかたらむさくら花
手ごとに折りて家づとにせむ

ともののり

みよし野の山べにさけるさくら花
雪かとのみぞあやまたれける

紀貫之

世の中に絶えてさくらのなかりせば
春のこゝろはのどけからまし